石川さん連載（続続）

石川さん連載 3 は「治療的関係」、4 は「伝えること」である。そして、最終回 5 は「残したもの」であり、その最初に私のコメントが載っている。痛ましい「事件」後に、ある新聞報道に私が抗議したことが紹介されている。

偶然ではあるが新聞で連載を読む前、朝早くいつものように、同じようなことをレポートに書いていた。記事では私のコメントとして、「前は、自己主張の強い彼に反発を感じていたが、リハビリに励み、奇跡的に職場復帰を果たした姿に感動した」と振り返る、とある。

2015年（平成27年）2月14日（土曜日） 12版 社会 30

未完の論文 5

ある社会学者の死

残したもの

生きること 一番偉い

石川洋明の壮絶な終末期は、同僚や教え子たちに強い印象を残した。

昨年春に名古屋市立大を退官した名誉教授・山田明（六〇）は、石川の妻が長男を殺害した事件直後、一部の新聞が夫の肩書・専攻まで載せたことに腹を立て、新聞社に抗議した。それをきっかけに石川との距離が近くなり、つらい思いを聞いて一緒に泣いたこともある。

「前は、自己主張の強い彼に反発を感じていたが、リハビリに励み、奇跡的に職場復帰を果たした姿に感動した」と振り返る。ゼミ生の北川靖大（三二）は、事件後の講義で、石川が「妻子を守ってやれなかった」と涙を流す姿に感銘を受けた。ゼミに入って最初の作文で「学び」についての思いをまとめたら、ひと言「ダサイ」と切り捨てられた。当たり前の正論を持ち出すのは恥ずかしいことだと教わり「一年後に、よく書けるようになったと初めてほめられました」と笑った。

主治医で学長の郡健二郎（六〇）も「生涯忘れられない患者」だという。納得するまで自分で調べ、末期がんの治療法を選択する姿は六年間、ずっと変わらなかった。毎月のカウンセリングを担当した精神科教授の明智龍男（五〇）は「いつごろから、こちらが人生を教えてもらっている感じがして、自然に『石川先生』と呼んでいました」。

愛知県日進市にあるカトリック平針教会の霊安室に、石川と妻子の遺骨が一時保管されている。同教会では、長男、妻、石川の順で二年間に三度、葬儀が営まれた。

石川から「アリス」（仮名）と呼ばれていた大学院生（三三）は、これまで二度訪れ、遺骨に手を合わせた。

アリスは社会人になった後、人間関係に悩みを抱え、自殺も考えたが、思いとどまり、二〇一三年春に入学した。妻に似た弱さを抱えたアリスに対し、石川は修士論文の指導を手取り足取り続けた。読むべき本を指示し、考えの足りなさをたしなめ、生き方全般にもアドバイスを重ねた。妻を抱え込んだのと同じように。

しかし、約一年後の妻の死後はがらりと変わった。

「子犬のように何でもうことを聞くな、人形じゃないんだ、と怒られるようになりました。母親から親に変わったような感じで。きっと反省されたんだと思います」

その切り替えがあったから、石川の死を受け止め、前を向くことができたという。今、アリスが中心になって追悼文集づくりを進めている。つらくなると思い出すのは石川の言葉。

「生きていくということは、大変なことだから、時々悪いこと（依存症や虐待など）もするでしょう。清廉潔白に生きて自殺するより、悪いことをしながらでも生きてることがずっと偉いこと、いちばん偉いことだよ」

（敬称略）

＝終わり

（この連載は編集委員・安藤明夫が担当しました）

上段に石川、下段に妻子。一家3人の遺骨に手を合わせるアリス＝愛知県日進市のカトリック平針教会で

そんな石川さんに対して、ずいぶんと厳しく接してきたのではないだろうか。在職中、学生のことを最優先で考えて、石川さんが講義を続けるのを反対した。そのことで、入院先の市大病院の食堂で口論したこともある。あの時の「判断」がよかったかどうか迷うところもある。最後まで教壇に立ち続け、「絶望しない姿」を学生に伝えたかった思いを、今は理解してやりたい。

5 回にわたる石川さん連載を読んで、あらためて生と死について考えさせられた。想像を絶するような過酷な状況の中で、必死に生きて伝えようとした石川さん。私の退職の日に、「私も、やり残した仕事を進めていこうという立場ですが、スローペースが許されるかどうかは神のみぞ知る、です」とメールしてくれた石川さん。

連載を読み終わって、石川さんが私たちに残したもの、伝えたかったであろうことの一端を知ることができた。何といっても「生きること 一番偉い」という言葉が、私にとっても心に響く。石川さんが「未完の論文」で書いただろうこと、書きたかったことを若い人たちに引き継いでいってもらいたい。

（2015 年 2 月 15 日）